奥羽道中膝栗毛二篇

上

へ13
1164
58

特
へ13
1164
58

帝国図書館蔵

一東都見物左衛門の内　二人

ニテ男　市納戸茶縞のりん付ホそで
小風呂敷を甘あひ　ぢぐく笹
ちやうそく

アト婦　ねづこのあんの赤ちこれもこび
のちやうそく半ごち

一奥羽ごちやうひさくり　ざらのへんまさのかう
覧　道中膝栗毛第二編巻之上

冨金草雞東都見物之記一葉題

梅屋家豆

▲ことしはあつくてこまるあめがもんとまの
出がのめでござるはれ　雨
もうまんでござるはれ　雨
鼠色の雲がとやうして出る年
文化十年大いつたる　官町へ
武蔵にうへてござるがさそく
ムホりそうけいこあれたくさうの
おいはアハれ　ずんどやうでござることのさび
薬東東黄えの木綿三世さうそくがめそこ
できてござるやどまとれいこムホりこのこあげホぎあまんいてござる
●アトせんせいのいえ　まりとやりだやちやどホされくも社中ホつこありてござる
▲このこびきいえいのこと　ホいホそのどのきさハどのホそこのらされてはいろホ
ムホりとこかくらうとぞんぜるさそもよいこちづれそりとめてござるナントかこ　ホりこてござる
ムホさうをつんできちやハ　よんぞる　女房　小児　ぢるのかりくさう　しもる　祝まる　屋

山河海陸金銀乃出ぎる所なく作木
瓦石ふく以て毎年殘ふ物なく
汚さる墨黛ふ亡ぶ人を受て相
ゐ〻落て杜丹雜明ふ口（這入）例し
ゐ されば多ふ沖の豆ゑ〻ふ
〻てかせぐふ源遠流長名馬あり

祇ごとる墨ふ筆ゑ〻むる弟ゑ〻茶屋し
まるる英羽道井ゑ滑稽ふ行まて
初編の偶中ふ書録忽ち〻の原馬ふ附迄
海苔の試迄ふ二編三編ふ書ふの沼ふ
書を添て沼ふる事虎のゆし

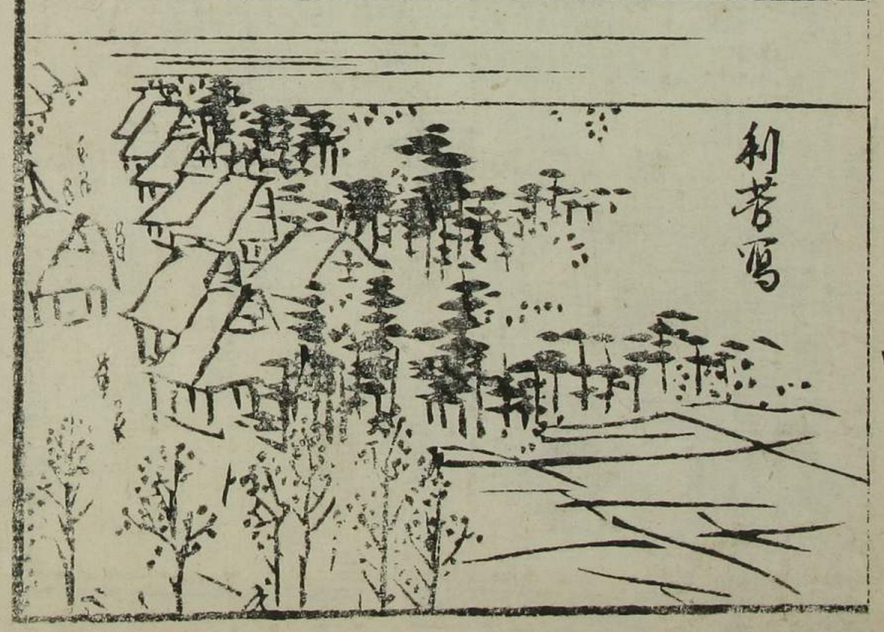
弘化申春稿成　十返舍一九誌

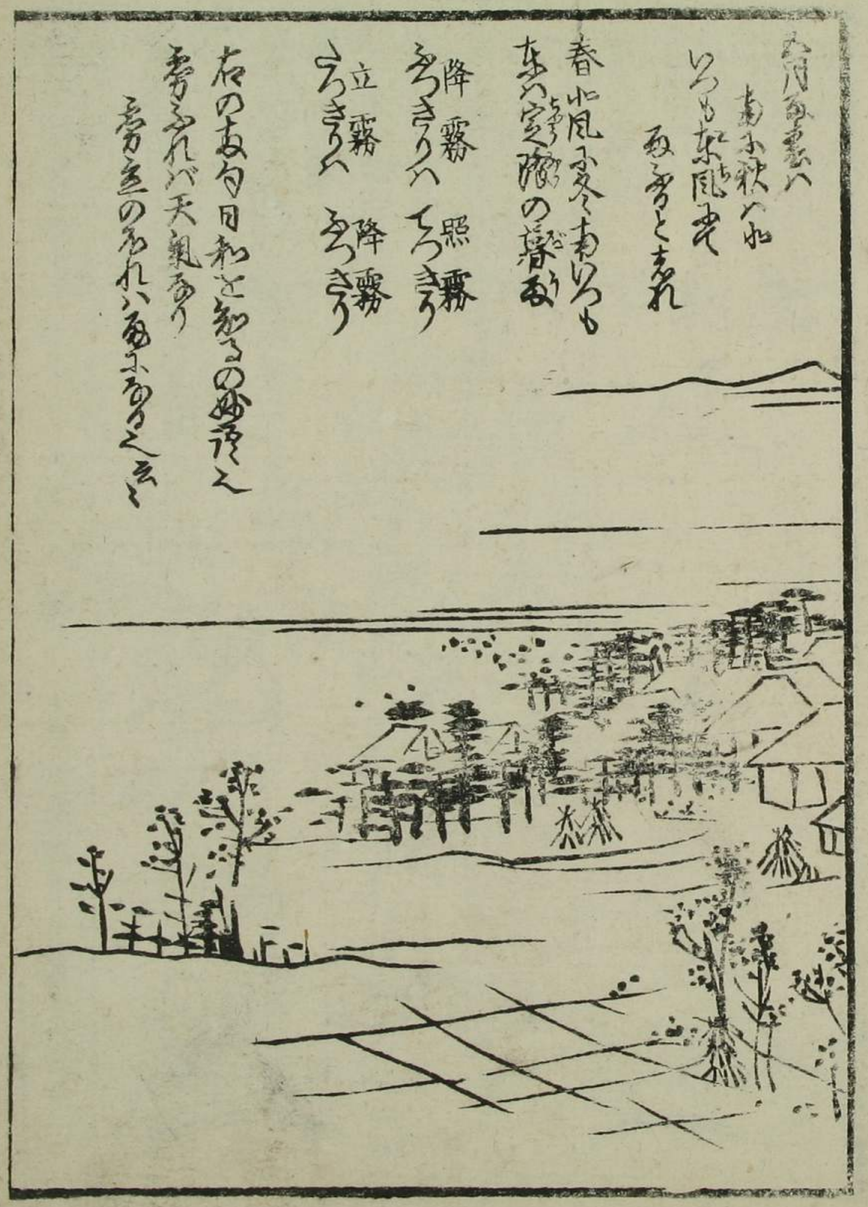
大原者
桃山花
見の圖
梅坪戯画

桃の
花
折る
手を
つる
ゆも
山花

越後
彩浮の
傀儡
雨降
松戸宿
の圖
一九松戸宿廿番目
止宿のさま越後より
傀儡を賣るとて宿に来
来迎えて入る客はいと
をりけれどこゝのは
女あり男女毎日客多く
つき添ふありこれを三味せんとい
ふ女はひきまり合羽をかぶり
きゐるなりどんきこゝろあり

旅行用心集


利書写

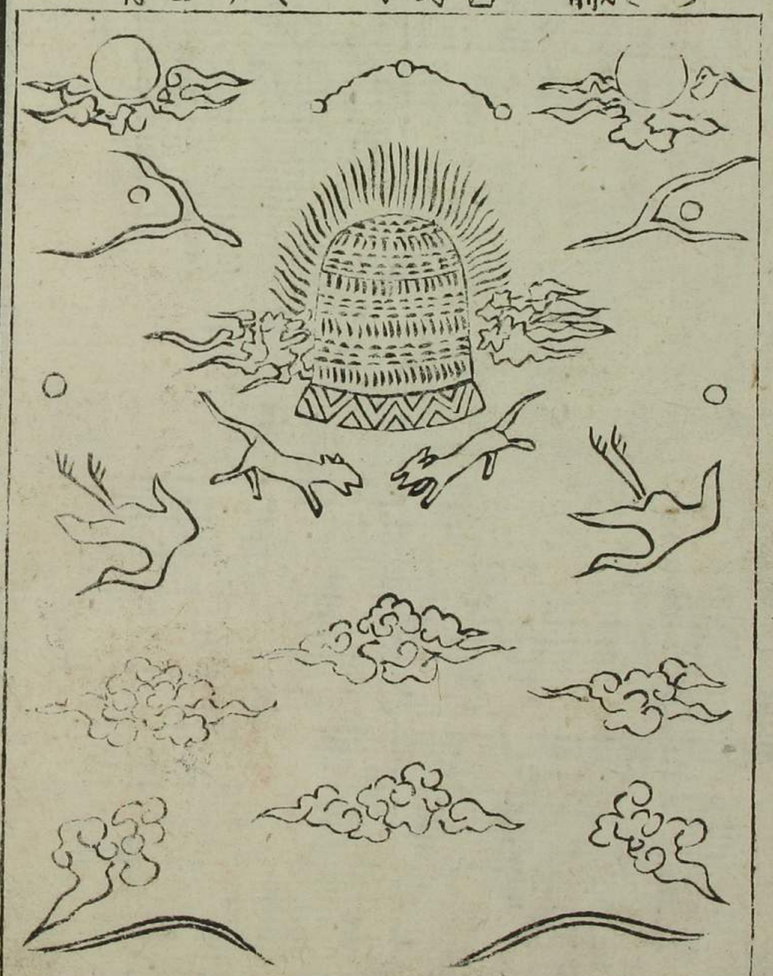

春は風ふきあるいも
其ハ定隙の暮あ
降霧　照霧
多きりハ　ちろきり
立霧　降霧
多きり
右の如く日和を知るの妙法と
雪ふれば天氣あり
雪立のふれハ雨ふるべしと

丈二尺五寸幅一尺五寸五分　外箱ハ近頃白川少將殿寄進せしとぞ

後白河院ゟ賜りし静御前舞衣之圖

あハ田中宿西の傍ら岩松山聖德院光明寺ゟ藏ス

地ハ紗ゟ似て厚く黑ク模様ハ紅白ゟて縫ら切付色々ス



續膝栗毛第二編卷之上

一覽道中膝栗毛第二編卷之上

十返舍一九著

後ハ憂めの雨皮のこげ茶漆ゟるをいとゝ夜ゟ五

よとてゟかさも通連國州四人の弦音年湯数多入ゲる

ゟ東雲つゞる羽鳥ゟ草ゟ宿の山寺をとりづるゝどゝ

空もうらゝゟ日の出まだゆくらもあるぎ。

新ゟ煙草くゆらせ、雜淡薄ゟ秋辺をさゞる氣數

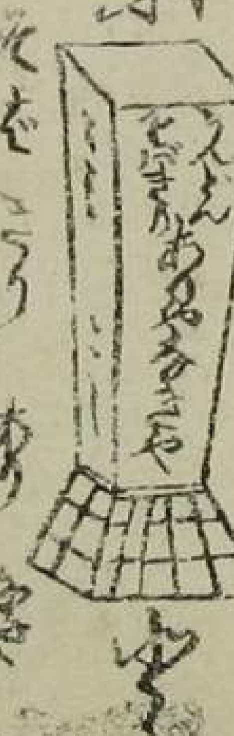
又仏のうもものゞべき「後ハきよゟ」

食らひのへ上手のサア団子やさ川まいりじやアねへきらぞろ
こりやどうして柏子の瓢箪男めがひよろ〳〵ふらめいてゆく
ちくら坊「おいら草鞋は立さアねへ」北八「よんでお供が出来さ
さつきからさるものが馬のうへ同士の尻をもつてのつてふんぞつてありがさア酒
手まへのせなかへは」北八「どうして今宿屋をさしてきたりで、
足へこの通りかゝつてしやきさ」馬士「そんなことぢやいかん、孫へりんさよ
男はおれがさ馬のんきなさろ」
馬を北八のかくびきよせるとよんべのさかなフウトさそあんどんのわぶり北八のきかぬでそでふ
あくびをせかぬ北八「そこをちくしやうめがア、あぶねへまでどうう
まちのぞくトいつて向へゆきかけるまご「孫八さんよヲアあれ下りだアモシ
北八「アゝあぶねへ〳〵馬からおちはしまいか弥次さんアゝそれおちるわ
いなアあぶねへ〳〵」弥二「まだ〳〵大丈夫〳〵
あし」弥二「おどけなさんなコレ馬士わしをのせろ」ちくら「このよう
なひとのくるはずがねへおちはしねへ〳〵」まご「どうとう〳〵どうどう
ある柏子の瓢箪男めがのぬかくあらはれて」北八「エ、
この屁をひりつけたはコレ袖がきれる〳〵」まご「袖から食も地をまく
のえんづくどうぶうぞんざい袖をもゆすくなさろう

弥二「とふだへおりやう　ちくら「あぶないわいなアごさんせんの怪我（けが）
のないよふにしなさんせ　ことがないが、おらが儘は馬士（まご）だぞエイ〳〵
まゝりおめへごろ〳〵ぶちのめさア　まご「どのんなさへアてこのどう
ぢくしやうめわいやいよウもうごんせへわたいぐ〳〵　弥「ヒイン〳〵ト　ちくら馬をのせてはなれか
ろくび　そばへ　ちくら「アニとんだアことをぞいぢやく行（ゆく）だめやアない　まご「かくり
おまへ遠慮（ゑんりよ）ばアがふ千疋（せんびき）までの紀ままへの　ちくら「そりやとひよう
あすこの千疋（せんびき）までかくる駕はぞんざアことヨいぢやうおや
るく　まご「のっこわまだアふんあぶなく　まへへいのぢ　このどう

ぢくしやうめわわいやく〳〵　ちくら「ヒイン〳〵　北八「エヽ返（えぞ）いまいましい
馬士（まご）さアそれ廿四文をやるへおろせ〳〵　まご「ヨせさアおりなさらねばの
そうるゝッてござい廿四文ぢやアすまアく　北八「チヨツ　ソレ五拾よ
まご「まんざアやアく　北八「ヨそ面倒（めんだう）なぞんならば百よ　まご「百や弐
百ぢやアおろせねへ〳〵　ちくら「ヨレ馬がそいねかく　おまま
のるといふことぞく　北八「清水（きよみづ）の舞台（ぶたい）からとびで弐百
五拾　まご「まんざアやく〳〵ト　このうち大ぜいのおひとおりさき
だちんのの人足（にんそく）つえをもつて
かぶりものとりさへ下アおく　おうちの　ちくら「コリヤく馬士（まご）おろさねへろ

「ナイぐアで強がゆゑる早くおりなさへ　「ヤレナちかくどけ
るハお殿さまでアトおりるまでハ思ハずさすてあきれてゐる　「どうするかと無言てかんで
ねこんだ金覆すおりるかくさ　「ゑハけくなくでゑゑるまのうモシ
「先ほもふゝさんもとんな胸悪ごのう旅羅さん　「死
とせうと天道さまでアゲひるとちふハござんるへ人を助さ
アでなりそう文一文入ぞ馬よりおりさア吞く　「なんの
それがかこどけねへめのうへ一文入ずはふるまゐ業ハ恭下大和
ごアハミハトつぶやさく此所をおるとおやせりとゑれ九右衛門

新田南生村をこーかくとべ村の入りにふ

書きる焔焼のあるをみて　「ナンだく塩焼蕎麦麪有やさせやう
コリヤ大鉢ごぶぢらん珍らしいたべのう這入てひやうてみんや
せう　「ホンニおれハ我思ふ酒ハ有やるないやとりふ蕎麦なぞ請ろうらん
「業平そばとハ酒落ちやあろう　「食ふてみたるると
こく並んでもそれ並べてみなさろ　「そのとく
どうぞそれがまへうりものをおとつて女房
其の下をふたふてみるがよろちてきさう
「ようおいでなされましたのあげます
せうな　「モシお内室さん業平のなうな男が蕎麦…

せツりやみきやハどうでごす　文蔵「ヨホヽヽ御亭主が田舎者の客
ロヽりまし遊へ　遊二「モシこうちの行燈ハ有やあれやと思て
奥ざしきの中へ何ぞ酒へ売りありやせうか江戸ッ子の
料理やうさるぽり解やせん　文蔵「ヨホヽ何おりしやる
うんどんやそば切からず　近吉「ゆうらども会席ハそれだ
ぢやろがおんかしてもありやみえやがるそハとん
ござらて「おまへの古亭さんへどさんかましく随聞
のうはひ会席　文蔵「おころぼでヤスごぶお客様方ふとん

事ことをカンづくハがお聞なさいとちの宿屋のへぶり
世の費も酒ハしとお客からもらそておびくの黒衣や
おいやらくの客さまひつおりとりして光の月御人の黄
ところへあのとくつてありますけ大人の好もあるめんで
おしそうろくでもござるめがその偶数がよけい酒の色
真黒な座さんとであぢくだらけ
小瓶ちよ元数とてやくらんもれなへポン二くよのく
ござるめいがおさな方がいくらうとうえアア　遊二「ポン二ち飲

北「なる程、お茶の子どころのこつ 亭主「ヲヤヲヤよせべのうまい、お客様
ごびいきにあづかりましてハイハイヨウト うどんの事をおもひだし 北「おど
きみの蕎麦をわすれさせたのでござりやす こちらくそばにまかりと うちもあさりのう
ぶちくとおもそふらう にて入りりござり「まつかたそばでも饂飩でも喜こまずい
さいわいがく安請け藪原の親方も大安堵でやらかしやせうト
わりわりをまるい、ちどもちのいれう 亭主「三十きぬ上酒を開ませう
芝居どう めきんぶれの事 一夕新れ その誂ひの酒ぢや 亭主「モンまいむよりのいあ
こまつてどうなるでのう 亭主「イヤめでたい

あれ藪原の親方の保山で材木へ芝居が賣れてござんす
せへ一しがおさ人形の隣へ所ののんごとぬうし
おつて猿芝居とおつちもおし何でも朝から晩までイヤ日
川の清姫ぢやの那の是のとてんからくピウピイミうどんどん
ちやんちやん祇園囃子でござんす芝居の邪魔になるめん
で近所でもやかましい騒ぎのことどうで拍子
見物人が何のと其の猿芝居の鳴物
きいてみてもそれぢやわいくらでも

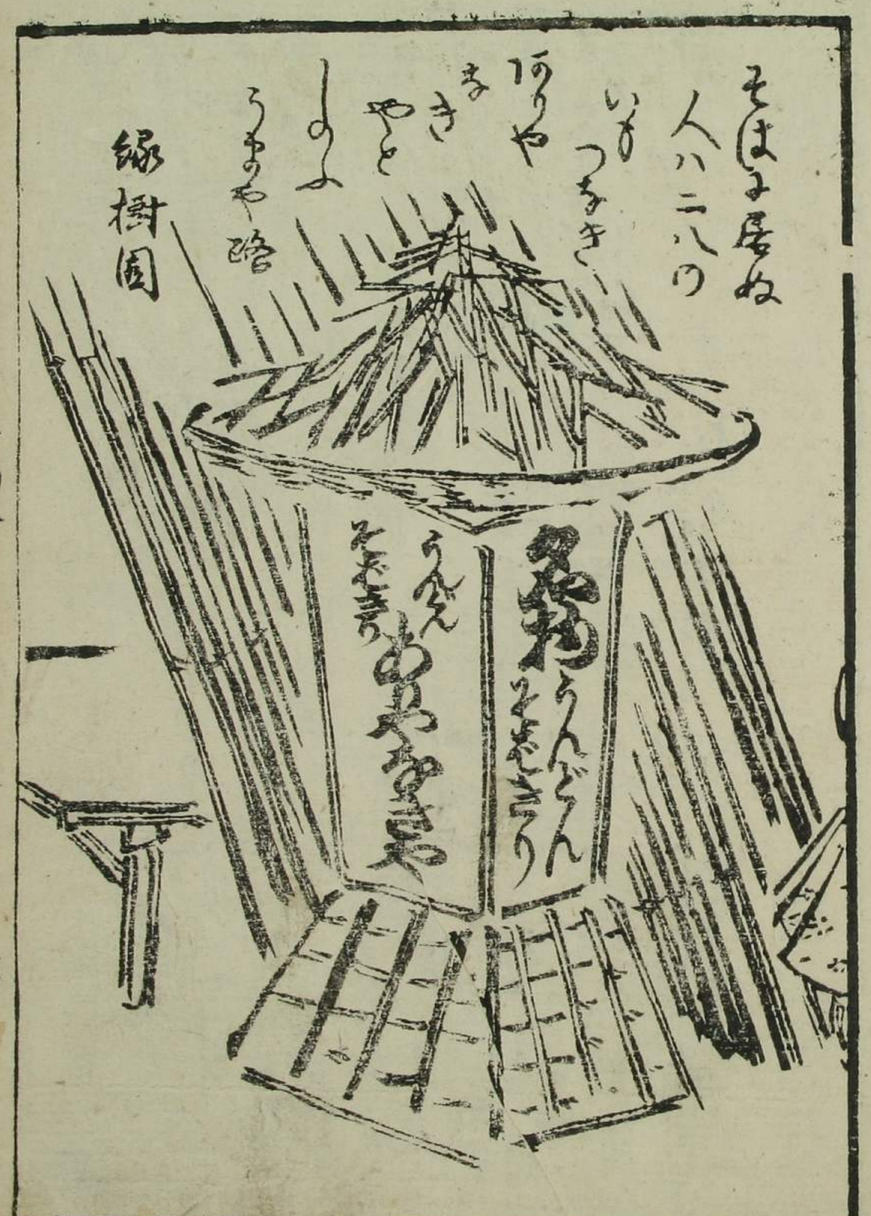
ごもなこんぢ終さやう一人も見物がなのやうぢアナント
已ぐ強のまえ丸ことうぞそこで山三千ぐ思つきで丸屋荒
の五服用のうちシ出て物でも稲葉ぢとまきこん
で浄るやまやアかまいなの二ッ五アニッも四ッも打ッさと
ちもたッせ葉の通り隙の芸居の懐ぐろのて紙玉
さのちう楽屋近辺ぢアぐけものわで歌柳ぐがらと
あのことアぐ嬉しさ毎日くぞんくと後始末だろう
何の編もらりけてちさぐなどういう間抜てう四五ぐ

ひどくひどくてだ丸の孫ぐ屋んべうの家ぢ裏ひぢっきよ
娘の歌のまんまで楽屋かうつるぢのひもう打切て懐ぐ所迄
迄丸さと思ッたッせそこの見世ぢアとの内ぢアぢ好きア
いねそこぐ高ぢぐ仕賞屋の座へかうんで一ッ寄かうう
ぢアの何のうちの車海老の鯖ぢアの鯛の鮨ぢかッらうとア
大さぢ丸ぢアるるへのうちれぢんアの前のことで先の寄まと此方
の寄まとあんまやッとまれふ丸でもせこ抜ひぢアよ
今かうこ江戸までひぐぢアの別深げふことをさんとこで一番やッ

くご「それハ大きな五菱でござりまるよ。サアくあがり
まし〳〵（こなたの四人ことのそれしおもひ
きりをそなてたべのそてせまをもも）「モシおろくさんあの坊
（どん）
ハ洗のわるやるきやハどういふ沢ごま（ヨホこゝあるや
るきやぢやこざりまし。るい。湯婆そばきりあるでござり
まス（しゝ）「そして下のるきやハ（ちゝ）「アリヤこちらのあるな。
（柳屋）
やるきやでござりまス（注三）「ハてよめご湯婆蕎麦切あり
（柳屋）
やるぎやうおきやアがれ（爽子）「うちもそとんご長屋のち
（ちら）「かけやうのぐるぐるとふきてつけて

こせんてこのうやけヤスト（注四）「アノかこさんもとろ
ゐど已腰がはよの後家で蕎麦屋をおもくこ根せ
のはつたこと女さ（ちら）「女ちふりん根げくすは根のつよこい
でさンなのむり〳〵満月ちふ海さラゲ龍ゑごうちふゑ
いんで乳のう下とうッ切てゑ玉のうおつ屋ごさろ
さちふぐゑいは根ゑてこさらア（注五）「は根ゑ屋の玉ら
ゑくゑ〳〵青の女ゑせそうゑ牝蕎ごらうゑぐくいこい
思ひをて乳の下とかッきてこびくも丁度ゑ玉の人前ゑ

後藤川經の所さて
しそよりと
四神地名録 巻四四ふ
乃元さうり水源ハ
那ふ計頃
元流ハ
所くの悪水落合葛飾郡
閼田村ゟ閼田川ふ入る
阿古屋松 草加宿さ
ける間の
東ふ山
でくみ
山ありまて
下総の
ありとの


そばよ屋ぬ
人ハニハの
いな
つるき
ほうや
まき
やと
しの
うまのや路
緑樹園
うんどん
そばきり
うんどん
そばきり

あるのふ今時の女いその人所と兼知してもどころ
でも苦でも田地田畑あんでもかでもひろびろとうんで
ちまちのふ余程屋の人所と云る「まつこふ人さんが
始こぞ「エそいちぞのことを屋くいと人ごろよと
ちまちせんぞのの名ありがとちと村ふさ〜かれぞこふ
大きこそ一ツハすんでと「ヤアでッかい燈せん屋くうこ一ッかひまく
屋く「リヤアいこも一枚買やせうぞ。ハどうぞ「そんろのうち
食こうてとさまこねせんけぞうぞねぇ。お歯ふ食ふこの女房
「お歯ふ合どころでいとこうまこねぇ。おまこふ来方ぬ

わぐこれまく「こうなぐさる及ハおどけこふいちこまく。
うこふそんぐうとこうちやぐざんろの米拵かんでも浮屋く
歯ぶやうぐぞんろの「ホンニたれぢやふ廉まちしまこ宣
あてその歯ふやとこうちやの煎餅ハ雪の世りろで二三枚
も雪てめ「わがこうてもたふのぐ所の名物でぐさりまく。
そまこそうこ所ぐ出来ぬぢやお丈夫なお歯でいふのがあり
「これて来るハ一ちこく年ふり来る「あんちぐ丈夫ふ歯でぐさん
ふのいとぐ屋いくうこう五枚も七枚も打宣て食屋こう

てゝ　やうきこゝろそ大きゝろ　あそせんべの
七八まくをきして大豆をおいて　ゑたく「メリくと
まゝ「コリヤ　ほとをひち　歯をゝそんでハおてようも　弱ゝ
「こんぐゝゝ　ゆめんくでもゝ　ぷらゝ　初めて　ぷさゝ　出来さ　ほへ
かなさのとぐもとがりゝ　かゝこぐのて　孫　ゆのそぐけ
ごうゝぐゝ　豆こんゝ　豆ゝ　いくらもうむぐゝ　ハくのまゝ　をむしゝ　ふゝ
「ぜんゝ　ぜんぐゝ　ふぎづむ　ぜんぐゝ　ぜんぐゝ　ぜんぐゝ　ふ
ゝをさゝ　モシ　ぐさゝ　清のう　排まゝ　「ぜくゝ　をこ
ぐ一枚　ち　歯のち　丈さゝ　ぐ　拾八　枚　百五　拾六　又

かゝりぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　「遠ぬ　その通ぐ　ソレぐ　八ぐ　ぜんぜ
百五拾又　ち出　ゝ　ゝ　「ぜんぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐ　丈
ぐゝ　歯ぐゝ　ぐ　食て　ぜんぜ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぜん
まゝぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　清のう　ぐ　排ぐ　ぐ　ぐゝ　ぐゝ
ぜんぐ　ぐ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ
ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ　ぐゝ

食着があるものゝ食かけくこの袋へ入て世やで文通くの
楽がよふかあら女房「ホンニ左様になされましたらお土産に
つかまさうト　ゑたる下へつゐてさいはせんくさあく女房「いエ
お好なますへあそこいらお茄の丈夫な治隠居なりや「おきやア
ごきもん悪くおござる百四拾八文焼酎黄櫨を金かるとへいなる
夜ハあきさんで　北八「夜よこどがるの一首かんご
くぢらは淫黄酒でりくきめを
月よっても宿のござんせ

「五つ序にちらも一首よみよまさ
後悔のあぞをかんずるえとくば
さてこそはへ禍の門
北八「おもしろいくトそれより銚ケ谷の宿にいたる。橋を大
沢橋といふ。是より少を大沢といふ古刹根川にそひ寮蔵
花にいたる追桃泉一九二里余も清く山に飛ましとり桃山
とよりの奥桃の瑾通といふすの孫ゆすく李なすす芸くて擢る
ツイヒガ村最上あり　北八「彼あさゐとんの宿のあはせまし

緑樹園
山の芋
うなぎと
なりし
例われの
金の法華
酒
あてみ
ちら

紙子屋相の内
大和屋の方ふ男伊
女伊の二社あり
結流屋の方ふ隠男
とゆへ流屋の方ふ
ゆりも厳廿立石

大相撲村大静ちらく。眞言宗の寺さあるぞ。やくとうめくる
屋くうとのんと雖有不動尊ぐいまーまん度雑沓都ぐ作
ちんで相撲大山の不動尊と同時ふ作ちらぐ名いとり
ごつおめくる屋くムン一ヲイト先人奇々妙々といふ画屋ぐ彼
稿者ちこ一ハン大そうるるるとりひ出さ。やハぐ画屋ぐ出で
るやつ大相撲の不動さやごつ。ちとやつ一ハンそんるちくせ画屋だやつ面。不動尊ぐ屋ぐさ
るるといふぞ。もちく不動さやの系統あるりて早く那国

いろて一重ちとさ。明ぐごびくーてきてこ一ハンそ
りごぐ行ごうに滅ーくあってきさもこ出せ先別の法華経
おくた載いこーこの一ヲイトさりいるう風屋。このるる指の
数義の表の根のかいうねぶ。お前さうきぐらいる縁を
かき廻ーこ扱ふるのやうな薗で赤く剥ーこるの色飛ち食
着ぐあるるのうこといて置くぺこそれと飛鳥も押う添い
一ヲイトいめるるの奴ごまごそ一ハンそ行ちるるう
ごいふぞ。ちぞつくーうちつぶき出ぐて大屋大林大宝下論

と捨ておいたれば、此所鰻鱺の名物高名にかゝり。
辺の沼と鰻鱺沢とらくさん枝村にて、沼沢等、藩この鰻
屋をまた「ちゃうど時刻ゑもまで待ぶを、きゝ川屋同ぶ元
の門ときゞ」「どうも沼くさんの面白、たくってゐる。
ちんと新らく。後ぶ杉田の梅同ぶ場の門といひて、この
古いより新しいがいかるべい」「いゝぶ安いんぐに面ぶ
「じどうも古くってきらねく」「面のゆぶ、ゆぶ、ゆく
「ア、遠へぶせうと」「いゝゝしめれ」「おわぐり

きれ」「ぶと二番」「わすさんわるいところを書くだろう
焼てらんなせくそれらうあとゝ遠くぶ」「小く鱚魚へ上
まぬう」「おまさんの鰻鱺魚だり」「そこぶ尾ッ子
ぶるる」「そって祝いごめんぶ」「ぶとゝのぶ愛嬢ぶ」「
さよるゝ舟ゝ舟ゝ」「ゝるく面白ゐ」
お前の舟ゝ泥くさいのも事抱ゐる」「沼うぶぶ
ぶぶの事ぬ泥くさいぬぶ事ぬ」「めんちゃぶ早く
酒のうめ」「ハイ」

「きゝなり」「弄姫」「是で胸がすつゝのこゞザアく先生
お婚姻せく」「孫さんちゝ年寄だやろが」「あつらほい
サアく遠慮なのよく」「うゞ孫ぢくもおごりのお扶
ごゞで」「ヨホ〳〵よく私の名をごぞんで」「あんちゝご
「けさ老人はお茶のみやお祖父さんごゝのうを名と
郷ちゝなくつてどうまるもんぢ」「ゐんのめでは座らッ
あるゝ者も七ッのまりこの内へ年寄を抱られてゝう
一度も田舎へゞねましねへぢ」「吾がこゝ年の秋の

でゝのこゞ親父さゝがどうらくでゞまゝこねまくらて
とうくかさゝがさゝがゞ出てゝいくこゞゝ深でゞ男親の立ッて伯母
爲へ中も便ごゞうく長の奉公ゝ中ゝこゞかさゝの親父
さゝがゞの子孫と立ッれて立ッて昔までかさゝの子孫ども
出来まねゞふゝきる縁でお祖父さゝの子孫かゝる人
伝へ中ジゞ大相撲の不動さゝの法利せでなるこゞゝ
まゝうゞ月まかくゝ初てゐれど親父がくゝいも孫の吉
先ゝ親父の孫のゝをくさゝんてかさゝの子

同座せて下さりをせうが。あるこずも若くよ泥をを
ちれやうまく　一そんをうお義ぢもとうはてあるこら
　一おまさの安まをぐよのうごぎそんとてごぎりまくもりひ
ごぎくかのくそ流ごがれてありまあぬ　一イりこう
流なきんなを連ぐのくはでおれとをくんへ泥とをくんふ
かきんふをを座れるこいまんぐ。サクく座ぐとおれををるが
い　一バイくありぐこうごぎりまくしゃをまるこ　一がくあを
ちくと鰻鱺魚でも食て精をを附て氣をを文ふれぐて

　一こんぐこうるのを耳ふ止て。氣ををぐうなの。
めごのをぐりごア　一ラくねごこの近ようを
出ぬ。ニシく若くとしこうるを僕のをるんくこ。今ふ落ごい
ぬで朝起るぐをいりてありませぬ。そのねごひのを一をだい
かをるぐ若ふ病でごぎりまして。ぐうごぎ酒ぐ出ぬてあるこ。
今ぐごぐこんをうまして。おきあのをくをるふををで
ぐごをうまこ。初てをを通ぐきふ。ましてりおのをこぐ。
手紙一をかををふ出て。ぐごをうまこ。鱈会ぐこをうり酒

まして拙者ごとき知ります程の事は絶間なく
聞まする程に月数人の小者ども旦那さま
ゝ共ひとりぐらい今まで殘りてござりまする。
ぐらい殿の中へ封込でよこしなされ
まの乳養に成とも殿の方帰松が好るりんでもかつてが
名いくらかつてくださりまし
ませうが酒いくらぐらい封もるるでかさるの世話がやけませう。
ど直すまでまゐりまし
ん。

おりてゆくとあとからくちらし
四人ばかりとそれ合せて
殿さまいろ今浪つくこころ
藩の船かさ捨刑屋さのむこまるふ今
いひつくのかたり屋るつ
せるぶ上ゆ別ごろう法さん
ぶりうまとくしくまるの
おどのゆく早く藩ろこ
ゆる是をおこのこゆ

一おろのゆひさこせんもうげ
一おろ
一さよ

この方
六隅で五寸ばかりあるものを作ればあるこの三寸ばかりまた

[illegible]

雑ぐ上書をかくこうのぐそ「今
らあきさえの吉辰ホ新はじさ「よりくおれがいもうホ
とり色て厚て毛ぬく服と早く持てききし「只今
むをまくとぴまありはじさト[illegible]左指
るこ又お屋りホよりくお新ヤもまくよるぶさたしてえ
選りしい親るの指合思ひ毛られてあそれのるどもあり

[illegible]羽
一覽 道中膝栗毛拾弟二編巻之上畢

卷一